

BULLETIN OF THE FOLKLORE SOCIETY OF TŌHOKU  
(TŌHOKU-MINZOKU)

CONTENTS

Articles

- Early Modern Period Nichiren and Shūgendō's (Mountain Asceticism) Enlightening  
of the (Common) People : The "Shūgen Koji Binran" and the  
"Shūgen Danmon Gutō Shū" ..... Hitoshi MIYAKE 1
- The Historical Transition of the Group of Children and its Festival in the Community :  
Case Study of Tenjinko in Uematsu, Natori City,  
Miyagi Prefecture ..... Izuru AIZAWA 25
- CHASEGO2 ..... Yuji INE 35
- Enatsuka* (grave for placenta) in Ishinomaki, Miyagi Prefecture :  
a stele related to Shinto priest Shigaku Hino and  
female doctor Tomiko Yamazaki ..... Shinichiro ISHIGURO 41
- Stonecutter Traditions about regional stones :  
Nobiru-Ishi in Higashimatsushima city ..... Toshie ODAJIMA 51
- The Reconsideration of *Tagaichi* :  
Street Markets and Vendors in the Senpoku area ..... Shino YAMAMOTO 59
- Fortune Picking Ceremony for Large Catch of *Hatahata* ..... Shuichi KAWASHIMA 69
- Shishi-Odori of Kanatsu-ryu (3) :  
Genealogy arrangement of Kanatsu-ryu ..... Hiroyuki OIKAWA 79
- Where Religion and Politics Converge :  
The Case of the "Election Shaman" ..... Dale K. ANDREWS 85
- Jangara Nenbutsu-odori* in the first *Bon* festival : From the investigation of  
Katohno Town young men's association ..... Ribon SAITOU 95
- The custom of sacrificing the victim on the sea :  
Taking the area of Kesennuma as an example ..... Yuki ONODERA 105
- The change in the process of anatomy cadaver memorial  
in Tohoku University ..... Ayaka TABUCHI 113
- One instance of the faith "Otanasama" : Around Nagahashi District,  
Rokugou Town, Yonezawa City, Yamagata Prefecture ..... Mutsumi FURUDATE 121
- Reconsideration of Belief in Oni in the Tsugaru Region of Aomori Prefecture :  
Investigation of Ajigasawa Town in the  
West Tsugaru County ..... Kantaro SAKURAI 131

The Folklore Society of Tōhoku

27-1 Kawauchi, Aoba-ku, Sendai 980-8576 JAPAN  
c/o Religious Studies Tohoku University

# 東北 民俗

6/2017  
第51輯

目次

- 近世日蓮宗と修験道の常民教化  
—「修験故事便覧」と「修験檀問愚答集」— ..... 宮家 準 1
- 地域の子供の集団とその行事の変遷  
—宮城県名取市植松の天神講のこれまで— ..... 相澤 出 25
- 泉松陵のチャセゴ ..... 稲 雄次 35
- 石巻の抱衣塚  
—神職日野志學と女医山崎富子に関係する石碑— ..... 石黒伸一朗 41
- 土地の石をめぐる石工の伝承  
—東松島市の野蒜石— ..... 小田嶋利江 51
- 互市再考  
—仙北地方の市と商人— ..... 山本 志乃 59
- ハタハタ漁と籤引き神事 ..... 川島 秀一 69
- 金津流鹿踊の系譜 (三)  
—系譜の整理— ..... 及川 宏幸 79
- 選挙と信仰の接点  
—「選挙カミサマ」と呼ばれる民間巫者を事例に—  
..... アンドリューズ・デール 85
- 新盆行事におけるじゃんがら念仏踊り  
—上遠野町青年会の調査から— ..... 齋藤りぼん 95
- 海難者を祀る習俗  
—気仙沼地方の事例を中心に— ..... 小野寺佑紀 105
- 東北大学における解剖体慰霊の変遷 ..... 田淵 彩加 113
- オタナサマ信仰の一事例  
—山形県米沢市六郷町長橋地区を中心に— ..... 古館 睦 121
- 青森県津軽地方の鬼信仰再考  
—西津軽郡鰺ヶ沢町を中心に— ..... 櫻井歆太郎 131
- 卒論・修論発表会の開催 / 平成28年度年次報告 ..... 141

東北民俗の会

## 選挙と信仰の接点

―「選挙カミサマ」と呼ばれる民間巫者を事例に―

アンドリユーズ・デーブル

はじめに

平成十五年（二〇〇三）の秋夜、ある村で、筆者が元村長であるM（当時八十歳）と二人でビールをちびちび飲みながら、彼の息子の選挙事務所で、息子が出馬した村会議員選挙の結果発表を待っていた。その選挙事務所は元村長のファミリービジネスである米穀店の米倉庫だった。コンクリートブロックで建てられた倉庫の奥には、息子の笑顔が写された選挙ポスター数枚と「必勝祈願」と衆議院議員などから書かれる為書きが貼ってある。壁に沿って置かれたテーブルには、片目を入れた大きなダルマが載せられてあった。選挙事務所には、供え物や神具の飾られた祭壇があると想像していた筆者は、「なぜ祭壇がないの」と尋ねると、選挙ポスターと為書きに指をさしながら、「それが祭壇」だと楽しそうに答えた。この話の中から、思い掛けない情報が転がり込んできた。選挙事務所を開く際には、

Kという地元のカミサマ（民間巫者）に祝詞や、お祓いを依頼するという。このことに筆者は強い関心をもった。「存知のように、選挙はお祭り」だとMは付け加えるが、話の筋道を辿ると、勝敗が決まる選挙では、勝利の期待でわくわくするが、その反面危険が潜んでいるという。選挙である限り落選の危険を伴うことを考えれば、相手より優位に立ちたい強い気持ちを抱く候補者は、様々な手段を尽くすことは容易に理解できるだろう。目標達成のため、候補者らにとってKのような人が欠かせない存在になっているということもあり得る。

本稿は民間巫者に関する研究蓄積に一つの新たな研究事例を付け加えるものである。研究対象となるKがカミサマとなるプロセスを辿りながら、彼女の仕事に注目し、地域社会の歴史的背景を考慮した上で、彼女の選挙への関わりを要因を析出した。杉本仁が著した『選挙の民俗誌』<sup>2)</sup>の代表的な選挙研究を踏まえ、選挙と信仰の接点を示し、選挙民俗の理解の新たな可能性について考察するものである。

### 成巫過程

Kとのインタビューが実現した平成十七年（二〇〇五）八月、彼女は既に九十歳の誕生日を迎えていたが、独特な生涯について年に似ず明快に述べてくれた。自らの幼少期、青年期については触れないが、「岩手県の秋田県境の



所、八幡平の麓」である岩手県松尾村(現在の八幡平市)で大正四年(一九一五)六月十五日に生まれたという。彼女は自分がカミサマとなるプロセス、すなわち成巫過程を、出身地とは異なる嫁入りをした地で過ごした。想像しなかった運命が彼女を待っていた。成巫過程について筆者が尋ねると、なぜ彼女が現在も住む村に定着したのか、その理由から語り始めた。昭和九年(一九三四)に二十三歳で結婚して嫁いだ村は、訪れたこともない、親戚もない、[全然知らない所]だった。しかも、夫はまもなく戦争に行き、彼が不在の七年間は、夫の父母と祖父母との共同生活を過ごした。親密な相手が一人もない社会で、彼女が不安な立場にいたのではないかと想像できる。しかしこの土地に暮らすようになった理由として「きれいな気持ちの人はこの村にまるきりいなかった」と彼女の話は意外な方向に走り出す。神仏には「五十年使われました」とありのままの事実を述べる。「神様に使われるため、すごく苦勞しなければなりません」という開けっ広げな発言からは、神仏との緊張した不釣り合い関係の中に生きてきたことが感じられる。こういった発言は、自分より大きな力に導かれて、Kが村に辿り着いたという印象を与える。

Kの物語そのものを考察する前に、まずは成巫過程を確認しておきたい。近年、巫者はイタコの衰退によって世間の注目を浴びるようになった。東北地方の巫者、とりわけ

Kが成巫過程に在る間は、他のカミサマに関わらなかつたそうである。Kは自らの成巫過程を「釈迦様がこの世を開いて、神様になったと同じ」と喩えて説明する。聞き取りにおいてKは、巫病に罹る入巫前期から巫業期に至るまで、自分独りで乗り越えたことをしばしば強調する。

巫病が決定的な局面を迎える成巫期においては、精神が高揚する宗教的な現象、とりわけ神憑きや口開きなどが起こることが一つの特徴である。心身機能が衰えつつ、苦悩のどん底にいたKの場合、「何日か分からなくなった」という日常生活の中で、ある日突然意識を失い、寝たきり状態に陥ってしまった。「春から秋まで、目が覚めた時、もう雪が降っていた」というふうな病気の期間を表現する。

その眠っている期間内に、「あの世に渡って、彷徨った」ことがあった。こうして宗教的な経験は最高潮の局面を迎える。彼女は「お不動様(不動明王)が面前に姿を現したことを、次のように鮮やかに物語る。お不動様は彼女に「お前を殺す」という判決を下した。それに対して彼女は「はい、お不動様の側に行くならば、殺されたい」と答えた。そこでお不動様が彼女の死を何時何分と予告した。

自分の死に直面したものの、恐怖に襲われることなく、「はい、殺されます」と処罰を素直に受け止めた。そうするとお不動様は彼女の誠意に感応して「お前を殺すのは駄目」と判決を取り消し、彼女を娯楽に連れて行った。あれ

カミサマおよびイタコに関する研究は積極的に行なわれていた。川村邦光はカミサマの成巫過程を次のように段階的に分けて説明する。「(1) 入巫前期―心身不調、(2) 入巫期―巫者への関与・信心、(3) 成巫期―巫者の勧誘(白い着物を着る)・神憑き・口開き・信心・行、(4) 巫業期―霊能の発揮(病氣直し)・神の道・神商売」と概観できる。これらの段階を記憶にとどめ、Kの成巫過程のあらましを辿りながら、彼女がカミサマとなるプロセスを検討してみたい。まず、入巫前期に目を向けよう。

入巫前期はカミサマとなる人の門出である。Kにとって、三十六歳になった昭和二十六年(一九五二)は人生の切れ目であった。「一年が三百六十五日、ご飯を取る暇何もない。そればかりなの。毎日が繰り返しだから、頭がおかしくなっちゃった。全然分からなくなった」というふうに精神的な不調に陥ったことがカミサマとなる出発点であった。「京都の別当様は修行の一つで、お茶ばかり飲ませる」と述べるように、健康状態が崩れて食欲はなく、「お茶だけ取った。一年ですごく痩せた」という。彼女はまるで「ホトケサマ(死者)の姿になった」と説明する。その頃の姿を思い描いてみると、マンネリ化した日々から生まれた苦悩が体中に現れていたと考えられる。カミサマとなる者が異常な心身不調の状態に陥るのは、いわゆる巫病である。

以来、彼女は「神様と話すことになった」そうである。つまり靈感が獲得されたということである。この大きな峠を越したことで、彼女は因縁に起因する巫病から回復し始めた。

Kによれば、因縁は「人間の罪」である。前世から定まった宿命だけではなく、現世から定まった罪でもある。彼女の世界観の中で、七歳は人間にとって大きな因縁的な転換期で、七歳から人間は罪を重ね始める。「六歳まで何をやっても神様が許して」くれる。しかし「七歳の一日から、犯したことを、泣いたこと、悪いこと、何でも罪になる」と言い足す。この言葉は面白い。なぜなら、「七つまでは神のうち」という昔からの言伝えの理屈に従うからである。七歳から巫病に罹った三十六歳までに、正さなければならぬ罪の年数は三十年分と彼女は計算した。三十七歳の時(昭和二十七年)からKは神商売を始めたが、靈感が充分に備わってはならず、様々な神仏との因縁を解き続ける必要があった。その期間は三年三ヶ月と具体的に記憶されていた。因縁を「祓う」という表現は、時に「清める」に取って代わる。

Kはカミサマになる修行の多様性を説明する、よい例である。明治九年(一八七六)に指定された旧村社には、月夜見之命が祭神として祀られている。眼病平癒のご神徳があると伝えられる。郷土資料を読むと、神仏分離によ

り、以前この神社で祀られた薬師如来が、近くの寺に移された。しかし、本来の祭神はKに現れた「お不動様」と、Kは過去に村人から聞いたそうである。村の宮司が来れない場合、氏子の依頼に応じて、彼女が「別当」(神職)の役で祭事を執り行なうこともある。前時代の別当として同地区の旧家(苗字は地区名と同じ)Nは、同神社に司つた。この人物は過去に県庁に務める経験を経て、後に村長に選ばれたとKは話す。Nが亡くなってから、神社の戸が一年閉まったままであったとKは物語る。この間、祭事が行なわれず、祭神(Kにとつてお不動様)が祀られなかった状態だったのだろう。そして一年が過ぎ去った頃、神社から「神様がひとりで力を出して」彼女を聖職に召し、上述したように彼女の巫病が始まった。Kによると、Nの父も村の神職として務めていた。彼は「京都から来た」人で、「熊野山で修行した」経験がある、村の知識人としてKに記憶されている。彼女はNの父が書き残した日記を神社で発見し、「宝物と思って、持って帰った」という。意識不明の状態から回復した彼女は、日常生活に戻るが、農家なので仕事は休まなかったと強調する。つまり、百度参りや行屋の籠りをするほどの暇はなく、通常行なわれる修行は出来なかったようだ。ところが、畑の仕事に出かける際、彼女は祝詞などが書かれたNの父の日記を懐に持っていた。これはK独特の修行法である。「あのう、そういう

と、広く評判が高まると共に、遠方からの依頼者も来るようになった。最も負担が大きい時には、依頼者は数百人を数えたそうだ。聞き取りした当時は、高齢という理由で「もう押めない」と述べていた。

Kの依頼者は多種多様である。依頼者の願意を見てみると、例えば、物を盗まれた被害者、大火を防ぐ(家内安全)依頼する家の持ち主、商売繁昌を祈る会社の社長、合格をしたい受験生、子供・孫の進学を心配する親または祖父母、就職を希望する卒業生、結婚相手を求める未婚者などがその例だという。縁結びをするためには、例えば、Kが依頼者にどの方向に釣り合う人がいるのかを教えてあげるといふ指南の一例神託が挙げられる。ちなみに依頼者の悩み事の相談には乗るが、依頼者が何かの病気に罹っている場合、病院で治療を受けること、つまり西洋医学を頼ることを勧めると彼女は語っている。

### 特殊な神商売

Kが「選挙のカミサマ」と呼ばれるほど、彼女の特殊な神商売は注目されていた。選挙に出る候補者の因縁を祓い、運勢を占うという神商売の内容を、彼女は「選挙事務所開き」と呼んでいる。「選挙事務所開き」では、二、三万円の報酬をもらう。選挙の費用のことを考えると、高い料金ではないと彼女はいう。候補者から依頼を受けた場

ふうの因縁成仏している内に神様は、自然の神様を拝む力(靈感)を与えるの。誰も教えないから。祝詞を覚えて、まず何も知らなくても、ここはこういう意味だなあ、胸に教えるわけ」と彼女が言うように、日記は自らの神仏との因縁を祓うために使用されたものである。しかも、「字は要らない。(神様が)心に話す」(括弧内筆者)と説明する。Kの成巫期の靈感獲得についてここまで辿ってきた。ではいよいよ、彼女がその霊能を発揮した神商売を以下に検討していこう。

成巫過程の最後の段階は、巫業期である。Kの神商売は、鈴木岩弓が巫者を説明する「カミオロシをした上での加持祈祷・祓い・占いなどが中心」という内容と一致している。その意味では、Kは多くのカミサマと同様である。人の運勢を占うことについて、彼女は「きれいにならないと、人の占いは出来ない」と因縁を祓うことの大切さを力説する。そして「自然に人の占いをする」ようになる。巫業において神仏祈祷と精神統一は前提である。「自分の心が神様だから、心に映るわけ」と説明する。「最初はお客さんを拜んであげる気持ちはなかった。ただ農家として働いた」と彼女はかつて気が向いていなかったと語る。しかし周りの地域社会から「あなたが神様を拜んでいるようだ。拜んでくださいと人が来た」と彼女はいう。口コミで依頼者は次第に増えた。「あのお婆さんがいうことが当たるよ」

合、彼女の家に候補者が来る場合も、彼女が候補者の選挙事務所に行く場合も、いずれにしろ候補者の因縁を祓わなければならぬという。候補者と一緒に拝みながら、彼女は祝詞を読み上げ、候補者を清める。祓い清めなければ、占うことは出来ないという。

占う目的は、候補者の運勢を明らかにすることである。例えば、「口今の占い、こういうことを聞きたいそうです。が、神様、お知らせください」と、神様に直接切り込む。お告げの様子の一例を、インタビュー当時の選挙を引き合いに、以下のように語っている。「だって俺、本当のことを神様にお聞きしたの。今の選挙は、たった七十点(他候補より)多く取れば当選しますよって。神様でなければ、知らねえよ。それを…そうでしょう。今の選挙は、どれだけ点数が多いかが、勝つか負けるかの差」(括弧内筆者)と神様から答えが返ってくる。「まず、選挙が野党と与党争っているでしょう。与党の場合は、今日は何千何百あるけれども、そのうち何票増やせば、当選すると(神様が)教えるの」(括弧内筆者)と付け加える。彼女の言葉に明らかのように、神様のお告げで獲得すべき票数が分かっても、当選および落選は決まっていなないといえるだろう。むしろ当選することは、候補者の努力次第であると彼女は話す。



## 若干の考察

上記の「選挙が野党と与党で争っているでしょう」という発言に注意しよう。選挙時、聞き取り調査を行なった筆者は、村民から「選挙は博打」という言葉をよく耳にした。これと関連して「与党野党の争いだもん。勝てば、大したものです。負ければ、大変なことになる」と述べるKは、候補者の誰もが選挙で危険な賭けに出ることを示唆している。一人の主婦が「選挙がこの村の喧嘩になっっている。選挙が一番怖い」と選挙に対する不安感を言い表したように、村社会の分裂を起こすにしろ、候補者の身を危険にさらすにしろ、選挙は大きな危険を伴うことがある。Kは話の間、「選挙は戦だ」と何度も強調したが、喧嘩にせよ、戦にせよ、いずれも選挙が緊張感の漲る対立であることを表している。

筆者はこのような地域社会状況が、カミサマの神商売にどのような影響を与えるのかという点に関心がある。言うまでもなく、Kは地域社会から隔絶してカミサマとして活躍したわけではない。Kの特色ある神商売、つまり「選挙事務所開き」は、地域社会のニーズを背景に形成されたことが十分に考えられる。しかし、候補者のニーズはどこから生まれたのか、という問題が残る。すなわち、考慮しなければならぬ問題は、宗教的背景よりも社会的・政治的

背景であろう。Kが巫業期に至ったのは、昭和二十七年頃(一九五二)と説明されていたが、さらに残りの因縁を解くまでに三年三ヶ月を要した。この経緯から推量すると、彼女の神商売が落ち着いたのは、昭和三十一年頃(一九五六)であろう。実はこの年の前後は、彼女が嫁いだ村と隣接する村が合併した時期に当たる。

昭和三十一年(一九五七)に新しい村が誕生したが、合併までには多くの困難を伴った。村人への聞き取りや、当時の新聞記事を読めば、合併に反対する声は決して少なくなかったことが分かる。そして実際に合併した後も、村の政界には動揺が続いた。特に役場庁舎の建設が争点となり、議会で旧村意識に基づいた対立が生じた。二つの旧村の間には、役場庁舎の位置に関する論争が絶えず、合併してから十四年間に亘って「一村二役場」と新聞に大々的に扱われた。政権の交代により、新たに当選した村長は、自分の地区の旧村役場で業務を行なったほど村内の不和があったことも付記しておこう。合併当時に村議会議員を務めたMは、昭和四十五年(一九七〇)に第五代目村長となった。合併の頃を振り返ると、自分の地区に新庁舎を建設する計画をこっそりと練っていたが、「選挙中、そんなことは口が裂けても言えなかった」と述べる。それほど、当時の政治状況には細心の注意がいった。Mの初の村長選挙では、「両候補とも地区を代表する実力者だけに村を二

分する激しい選挙戦が展開されており、序盤戦の情熱は全くの互角」と新聞に報道された。この記録は興味深い。なぜなら、選挙に対する政治的な緊張が語られているからである。以上のことから、合併をきっかけに村内の選挙対立が激しくなると結論づけるのが妥当のように思われる。従ってKが選挙に関わる独特の神商売は、合併を背景にした政界の動揺から生じたことが推測される。

彼女は選挙への関わりを、合併時(昭和三十二年)の最初の村長選挙を例に以下のように語っている。彼女の住む村のIは、合併前に二度村長を務め、再び出馬した。彼女は彼女が住む村落の旧家から輩出された人物で、彼女にとっても、ただの村長選挙ではなかったはずである。Kは同時期の村議選に出た、親戚の男性の当選については語ろうとしない。しかしKは自ら積極的に、立候補したIのために当落の占いを行なったことを語る。「九点」の差でI村長が負けるといふ明確な神託があった選挙は、彼女の記憶に鮮明に残っていた。実際の選挙結果では、当選した他村の村長の二千四百十五票に対して、I村長の得票数は二千三百九十六票であった。Kは、Iが落選した理由として、彼は信仰心がなかったと述べている。しかしKにとって、神のお告げは一つの可能性に過ぎない。当選するのに先立つものは票数である。不足する票数は、候補者が補うべきと説明する。要するに落選する候補者は、ファイティングス

ピリット(闘おうとする心構え)が欠けているとKに理解されていることに気づく。ここでKが「自力で宿命を切り開く」という精神を重視していることの考察は、役に立つかもしれない。

Kに現れたお不動様は「戦の神」として知られている。Kによると、この地方の最も有名な三つの神社、いわゆる「三社」で祀られている神よりも、お不動様は古く、格が高い。この歴史認識には共鳴者がいる。選挙に立候補する時、「選挙カミサマ」に祈祈してもらうことを教えてくれた同地区の村会議員の口から、お不動様は「闘いの神」と筆者は伝え聞いている。こうしてお不動様を「戦の神」として崇めるKの世界観は、選挙を通して現れたと考えてよいのだろうか。忘れてはならないのは、「戦の神」であるお不動様が最初に現れた時、お不動様の手で死ぬのが宿命だったKは、自分の命をささげようと固く決心した。彼女の世界観からすれば、不屈の精神であらゆる困難を克服することができるのである。

「選挙事務所開き」の依頼を受けるKは、候補者のために祈禱をするが、カミサマとして中立的な態度をとっており、神力によって政界に干渉しない。「善いことしか拝まない。悪いことは全然拝まない」という言葉から、正々堂々とした闘いへの信念を明らかにしている。これは彼女の世界観と合致しているだろう。「人間の皆は花と閃いた(ふ



当選者がダルマに目を入れる

と気付いた)。火事があつたり、雨が降つたり、寒くなつたり、花は苗を出て、咲いて、枯れる。人間は同じ。人間はそれぞれ花であり、綺麗である。そのため、花を摘まないう。人を悪くしない。人を殺さない」と彼女は諭えながら、自分の道徳的世界観を雄弁に語る。結局、彼女はただ、候補者に無形の援助を与えているにすぎないと考えられる。

おわりに

本稿では、一人のカミサマを対象にして、彼女の成巫過程を時間軸として辿りながら、彼女の特色ある神商売の成立要因を、歴史背景に求めてみた。彼女の神商売の始点が、紛糾する二つの村の合併期と合致したことが明らかとなり、Kの選挙に関わる神商売の成り立ちや特色を示す、一つの手がかりにすることができたように思う。上に論じてきたことから、合併は村の政界に大きな変革をもたらしていたことが明らかとなった。候補者たちは、拡大された選挙区から生まれる不安に瀕していたと考えられる。

不確実なことをすべて排除することはできないだろうが、不安を吹き飛ばすように、候補者らは対立候補よりも有利な立場に立ちたい。出馬する候補者にとって、祈願したり、託宣をもらつたりする行動は不思議なものではない。そしてこのような地域社会の歴史背景から、Kの「選挙事務所開き」という神商売が始まっていったことが考え

られる。  
今後の課題として、選挙と信仰の接点をさらに追及するため、機会を改めて試みることにしたい。

註

- (1) お祭りとして選挙に注目した研究は、杉本仁「選挙の民俗誌―日本の政治風土の基層―」(農社、二〇〇七)。  
二階堂義孝編「むらの日本人―七〇年代・東北農民の生き方―」(勁草書房、一九七五)、一三五頁にも、同様な指摘がある。
- (2) 同上。
- (3) 川村邦光「巫者と憑霊―宮城県の事例から―」『東北民俗』一八(東北民俗の会、一九八四)一六頁。
- (4) 不動明王の以外、天の神、六十四神、三十三観音という神仏が彼女に「知らせる」という。
- (5) 史実としては村長ではなく、彼は昭和四年(一九二九)から昭和八年(一九三三)までの一期に村会議員に務めたことが確認されている。
- (6) 鈴木岩弓「第五節 南部地方の巫俗」『青森県史民俗編・資料南部』(青森県、二〇〇一)、三六二頁。
- (7) Kがいう「占い」というのは、祈願して、神仏などの言葉を託宣で聞き、判断することである。
- (8) 候補者の当落の託宣について、註1の杉本に同じ、四七頁を参照。
- (9) 同様の指摘がある。註1の杉本に同じ、四七〜四九頁。
- (10) 平成十五年(二〇〇三)八月三十一日の聞き取りによる。
- (11) 平成十三年(二〇〇一)の村議選の後、候補者一人が



- 落選したという理由で自殺したと村民が話した。
- (12) 『東奥日報』一九八〇年二月五日。
- (13) 合併した後、建設位置をめぐって平等を守る問題については「堀越久甫『むらの役員心得帳』(農山漁村文化協会、一九八七)八四～八五頁)参照。
- (14) 雨降って地固まるという諺がある。筆者の見解であるが、これは平地に暮らす人々の共存共栄の精神を表わしているものではないだろうか。合併した後、この村の軋轢が永く続く村内事情にこの諺を当てはめることはできない。むしろ、気候と地形に規定されている社会と考えれば、山に生きる人々にとって、雨が降って地滑るといえるのではないか。この村が平成の大合併(平成十七年)の交渉が始まった際、昭和の合併前の旧村意識が再び現れたという話を筆者は聞き取った。この逸話も、諺の逆をいく状況を裏付けるだろう。
- (15) 『デリー東北』二〇〇一年九月二二日。
- (16) 『デリー東北』一九七〇年五月九日。
- (17) 昭和二十年(一九四五)十二月から昭和二十二年(一九四七)十一月までと、昭和二十六年(一九五一)四月から昭和三十二年(一九五七)三月まではそれぞれである。
- (18) Iは次の村長選挙で当選して、第二代目村長となった。
- (19) 平成十三年(二〇〇一)七月二日の聞き取りによる。